〔読み切り〕　ぬらりひょんの孫　～Another story～

Ryota

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
〔読み切り〕　ぬらりひょんの孫　～Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ～

【Ｎコード】
Ｎ３４７３Ｕ

【作者名】
Ｒｙｏｔａ

【あらすじ】
東京の妖怪任侠集団〈奴良組〉が〈四国八十八鬼夜行〉と争っている頃・・・。
北陸にも妖怪任侠集団が居た・・・。
その名も北陸妖怪任侠集団（越後組〉

これはその〈越後組〉の話である・・・。

～前編～　北陸の魑魅魍魎（前書き）

ここは今だ謎の多い北陸の地・・・

そこの一角にドンと構えている妖怪集団がいた・・・

それが〈越後組〉だ・・・

はてはて・・・

また、〈越後組〉の屋敷から騒がしい声が聞こえてきた・・・

今度は一体何だというのだろう・・・

～前編～　北陸の魑魅魍魎

??「3代目ぇぇぇぇぇ!!」

屋敷の中を騒がしい声が駆け巡った。

??「うるせぇ～ぞ!俺ならここに居るぞ!イタチ!!」

〈鼬の怪〉
越後組幹部
生真面目で3代目組長に手を焼いている。

イタチ「あぁ～そこに居られましたか!探しましたぞ!青鷺(アオサギ)様!」

青鷺「朝っぱらからうるせぇ～んだよ!」

〈青鷺火〉
越後組3代目組長
赤みの掛かった茶髪と言うよりほぼ赤に近い色の髪型をしている。
赤の着物に青白い炎の絵柄が入った羽織を羽織っている。
自由奔放な性格で毎度毎度、人間の生活に参加していっている。
そのたびに鎌鼬によく怒鳴られていた。

イタチ「またぁ～人間ですか?」

青鷺「放っておけ!そろっと人間の学校に行くかもな!」

イタチ「なっ!?あなたという人は!?その前にまた総会をすっぽぬかしましたね!!」

青鷺「まぁまぁ・・・朝だぜ！少しは静かにしろよ！！」

イタチ「なっ！？誰のせいで私が大声を出していると思っているのですか！？だいたい・・・・・・」

？？「また、イタチさんか・・・朝っぱらから・・・」

二人の口論を見ている妖怪達がいた。

〈異獣〉
越後組３代目の側近
人間にも変化できる。
妖怪時はあまりにも毛むくじゃらになってしまう。
普段は人間のような姿で居ることが多い。

？？「異獣や！それも良いではないか・・・いつものことだし・・・」

〈濡女〉
越後組３代目の側近
幼少の頃から使えている。
面倒見がよく気が利く。

イタチ「分かりましたか！？」

青鷺「へいへい・・・今後気を付けますぅ～」

イタチ「明日の総会にはしっかり出て貰いますからね！！」

青鷺「わぁ～たよ！」

イタチはそれを聞くとさっさと奥へ引き返していった。

異獣「若！また、怒られたのですか？」

青鷺「ああ・・・こっぴどくな！まぁ・・・総会に出ろってよ！やれやれ・・・」

濡女「まぁまぁ～夜に出れば良いじゃないですかぁ～それとも出入りに行きますか？」

青鷺「ち、近い・・・！それと髪拭けや！俺は水はニガテなんだよ！」

濡女「あら失礼しました！でも私はずっと濡れてますよ！」

青鷺「ヘイヘイ・・・」（ふぅ～

ーその夜ー

ガヤガヤ・・・

屋敷に妖怪達が続々と集まってきた。

そして・・・

イタチ「それでは今夜の総会を始めたいと思います！」

??「その前に確認があります・・・」

妖怪が話しかけてきた。

イタチ「何だ?網切?」

〈網切〉

越後組系蠍(サソリ)組組長

網切「東京の〈奴良組〉に四国の妖怪共が攻めてきたというのは誠か?」

ザワザワ・・・

イタチ「静粛にそのことだが・・・誠じゃ!だが情報に寄れば〈奴良組〉が有利らしい・・・」

網切「しかし、もし奴らがこちらに攻めてきたとしたら?」

「何だって!?」(ザワザワ

イタチ「大丈夫じゃ!!さすがにここには目をつけないと思うぞ!」

「しかし・・・」(ザワ

??「やかまいなぁ〜!!」

突然青鷺が声を上げた。

「!?」

青鷺「そんなんで弱気なってどうする？四国はたかが狸だぞ！そもそも〈奴良組〉が負けるはずがねぇ～だろうよ！だいたい・・・妖怪がわめいてどうする？テメェ～ら恥ずかしくないのか！？」

シーン・・・

青鷺「俺からそれだけだ！それともう一つ・・・最近、オレらのシマで訳の分からん連中が騒いでいるらしい・・・そこでだ・・・俺は近々人間の世界に足を踏み込むことにした！」

「何ですと！？」（ザワ

またざわめきが上がった。

青鷺「どうやら人間はこういうのはかなりの情報通らしい・・・と言うわけでだお前達はお前達でその輩のことを調べておけ！そして、しばらくは総会を行わない！用があるときはこちらから呼ぶ！以上だ！！」

青鷺は言い終わると腰を下ろした。

イタチ「それでは・・・・えぇ～・・・今日はこの辺でお開きに・・・それでは若？」

青鷺「これから頼むぞ！！解散！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

異獣「って言いましたけどどうするつもりですか？」

青鷺「どうするも何もすぐにでも調査に・・・」

異獣「その格好でですか？」

青鷺「ダメか・・・？」

異獣「そもそも名前はどうするんです？青鷺火じゃマズイですよ！！」

青鷺「そうだな・・・青鷺　グレンは？」

異獣「・・・うぅ～ん・・・」

濡女「良いじゃないですか！！それで行きましょう！！グレン様？」

青鷺「えぇ～もうそう呼ばれるの？」

異獣「では我々も考えなくてはな・・・」

青鷺「えっ！？」

異獣「聞いてないのですか？我々もお供するんですよ！」

青鷺「異獣と濡女がか？」

異獣・濡女「ええ！！」

青鷺「マジかぁぁぁぁぁ！？」

異獣「本気と書いてマジですよ！！」

青鷺「えええええええ！！」

青鷺のうめき声が屋敷中に響いた。

～前編～　北陸の魑魅魍魎（後書き）

いいかがだったでしょうか！？

こんな感じであと一回更新します！！

ちなみに人気があれば後日、連載する予定ですよ！！

次回もお楽しみに！！

～後編～　闇にうごめく妖

キーンコーカーンコーン

先生「と言うわけで・・・突然だが転校生を紹介する！！」

（ザワザワ

先生「静かにぃ～！！ほら入ってこい！」

ガラッ

教室の扉を開けて一人の少年が入ってきた。

？？「ど、どうも・・・転校生の〈青鷺　紅蓮〉です・・・ヨ、ヨロシク・・・」

先生「とりあえず・・・みんな！仲良くするように！！青鷺の席は一番後ろだからな！」

青鷺「あっ！はい！」

青鷺はクラス中の視線を浴びながら席に着いた。

先生「それじゃぁ～ＳＨＲ始めるぞ！！」

青鷺（これが・・・学校ねぇ～）

だが、青鷺はこの後クラス全員から質問攻めをされることなど知る

よしもなかった・・・

ー放課後ー

キーンコーカーンコーン

青鷺（ふぅ～これと言った収穫はなしか・・・）

青鷺は帰ろうとした・・・

そのとき

??「青鷺君!!」

青鷺「うわっ!?・・・な、何・・・」

一人の少年が青鷺に話しかけてきた。

??「君・・・」

青鷺「・・・君は?」

??「おっと失礼!僕は、妖怪研究家の浦間俊介(はざましゅんすけ)って言うんだ!ヨロシクな!」

青鷺「よ、よろしく・・・」（変な奴・・・）

浦間「ところで・・・君・・・妖怪に興味はあるか?」

青鷺「ま、まぁまぁ・・・かな？」

浦間「本当か！？それなら・・・近々僕は妖怪について調べる部活を作ろうと考えているんだ！！どうだね？君も入らないか？君は見たところ・・・新潟の妖怪〈青鷺火〉と似たような名前だしな・・・」

青鷺（似たようなって言うか・・・本物だしっ！！まぁ～参加してやって良いかな・・・見たところ悪そうな奴ではないしな・・・）

青鷺「良いぜ！協力してやる！！」

浦間「本当かね！？それじゃ～早速・・・仲間集めをしたいんだ！青鷺君！メンバーを集ってくれよ！僕はもう少し調べたいことがあるからな！！」

青鷺「お、おい！！」

浦間はそう言うと走っていった。

青鷺「行っちまった・・・」（ハァ～

？？「大変そうですね？」

青鷺「！？・・・君は・・・？」

？？「私ですか？・・・フフフ・・・」

青鷺「誰だ？」

??「そんなに警戒なさらないで下さい!!私ですよ!!」

青鷺「・・・あっ!!濡女か?」

濡女「ピンポーン!!あっ!でも、人間の姿では、海川飛沫(うみかわしぶき)と言います!!」

青鷺「そっ・・・そっか・・・で、なんの用かな?海川さん?」

濡女「飛沫でいいですよ!!」

青鷺「それはそうと・・・本当に来たのか!?」

濡女「ええ!!だってイタチさんに言われたんですから!!」

青鷺「あの・・・お節介鼬が・・・。じゃ、異獣もか?」

濡女「ええ!!」

青鷺「どこに?」

濡女「イタチさんに呼ばれて帰りました!」

青鷺「そ、そうか・・・」(!?

青鷺はかすかな妖気を感じた。

濡女「どうしたんですか?紅蓮様?」

青鷺「いや・・・妖気を感じたんだが・・・気のせいか・・・・？」

？？「気のせいじゃねぇ～よ！わずかな妖気でも感じるとは・・・さすがは〈越後組〉・・・・」

青鷺「何者だ！？」

青鷺は振り返るとそこには

顔はイモリに紫色の着物を着た妖怪が立っていた。

？？「俺は井守（イモリ）！！〈越前組〉だぁ～！！」

青鷺「越前か・・・何の様だ！？」

井守「テメェ～ら組をつぶしに来た！！」

青鷺「上等じゃねぇ～か・・・〈井守の怪〉か？今までオレらのシマで調子扱いたしていた輩は？」

井守「ご名答！！オメェ～らの畏れを奪おうと思ったが・・・上手くいかねぇ～ので組長を潰すことに決めたんだよ！！」

青鷺「そうか・・・わざわざ挨拶にか？」

井守「とりあえずくたばりやがれ！！侵攻　井守の怪！！」

井守はそう言うと袖から大量のイモリを放った。

青鷺「やめときな・・・俺と戦うには戦力が足りないぜ・・・〈ア

ヤカシの怪火(カイカ)〉」

青鷺は両手を広げると両手から青い炎を出した。

井守「そんなのもので対処できるのか？」

青鷺「いや・・・ただ暗くなってきたからなぁ～」

井守「そんなことを言っているうちにイモリ達が・・・」（！？）

青鷺「イモリなら濡女が消しちまったさ！」

井守「い、いつの間に！？」

青鷺「おい！井守！俺の目なんか・・・見るなよ・・・？」

井守「えっ！？」

井守は反射的に青鷺の目を見てしまった。

青鷺「見たなぁ～・・・〈火幻術〉！」

井守「うわぁぁぁぁ！？」

ー？？？ー

井守「ここは・・・？」

井守は真っ黒な所にいた。

青鷺「ここか・・・お前は俺の幻術に掛かってんだよ！！よっと！！」

突然どこからか十字架が現れ井守を貼り付けにした。

井守「ぐっ！？こ、これは・・・」

青鷺「俺にケンカ売ったこと・・・後悔しな！着火！！」

そう言うと十字架の下の方から火が付き一気に火は燃え広がった。

井守「ぐはっ！？」

青鷺「コレが俺の鬼發（はつ）だ！」

井守「バ、バカな・・・俺はオメェ〜に畏れて居ないはず・・・」

青鷺「そうだろうな・・・皆そう言うぜ！だが、俺の目を見た習慣にオメェ〜は知らぬ間に俺を畏れたのさ！」

井守「ぐはぁぁぁぁぁぁ！？」

井守は燃焼した。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

青鷺「俺の幻術は精神を直接攻撃するのさ・・・今回は弱めにやったさ・・・テメェ〜らの頭（ボス）に伝えな！ケンカを売るんだったら真っ

向からぶつかって来いってな！！」

井守「ぐ・・・」

青鷺「さぁ～てと・・・また戦の始まりかねぇ～とりあえず・・・濡女！帰るぞ！！総会を開くぞ！」

濡女「はぁ～い！！」

青鷺たちは屋敷へと帰って行った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

??「あぁ～井守君・・・負けちゃったのか・・・まぁ～奴らの情報も集まったし・・・帰る哉（カナ）？」

一通りの様子を見ていた妖怪が居た。

??「オメェ～ら一旦帰るよ！組長に報告だよ！」

謎の妖怪は自分の百鬼を引き連れ・・・越前の地・・・福井へと戻っていった。

ーENDー

～後編～　闇にうごめく妖（後書き）

今回の読み切りはいかがだったでしょうか！？

感想お待ちしています！！

それでは・・・また！！

～特別編～　怪談はさらなる恐怖をうむ（前書き）

ぬらりひょんの孫ー千年魔京ーが遂に放送開始となりました！！

そこでこちらもそれに合わせっちゃって特別編です！！

どうぞご覧下さい！！

それでは始まりィ～

～特別編～　怪談はさらなる恐怖をうむ

ここは、北陸の地の辺境とも呼ばれる新潟・・・

そこで最も畏れを集めている妖怪集団が居た。

その名も・・・〈越後組〉

これは、そんな彼らの仁義を通した物語である・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

イタチ「若！！」

青鷺「聞いているからぁ～・・・何だよ？」

イタチ「また、我々の組のシマで何かしている輩が出たそうだそうですが・・・」

青鷺「今度は何だ？〈越前組〉か？」

イタチ「なにやら・・・怪談話のようなものなんですが・・・」

青鷺「怪談・・・？」

イタチ「ええ・・・どうやらこの地を狙っている輩は他にも居るみたいですぞ！」

青鷺「マジかよぉ～・・・冗談はイタチだけにしてほしいぜぇ～」

イタチ「なっ！？」

青鷺「冗談だよぉ〜・・・本気になんなよぉ〜！」

イタチ「オホンッ！それはさておき・・・その輩も調べた方が・・・？〈越前組〉もいつ攻めてくるか分かりませんし・・・」

青鷺「そうだな・・・よし！」

イタチ「何か案でも？」

青鷺「俺は人間達から聞いて廻る・・・オメェ〜は自分の手駒を使って調べるんだな・・・」

イタチ「また！あなたは人間ですか！？」

青鷺「イタチ・・・今回は冗談じゃすまねぇ〜かもな・・・」

イタチ「えっ・・・？」

青鷺「オレらの分からねぇ〜奴らが動き出しているのかもな・・・」

イタチ「と・・・申されますと・・・？」

青鷺「だから、それをこれから調べるんだよ！！頼んだぞ！！」

イタチ「はっ！！」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

ー翌日の学校ー

青鷺「・・・狭間!!」

青鷺がなじみのある人物に聞きにいっていた。

聞きに行った場所は例の人物が先生に頼み用意して貰った部屋だ・・・。

そこは・・・部屋というより・・・。

お化け屋敷化していたかな・・・。

狭間「青鷺君じゃないかぁ～どうだ?部員は集まったか?」

青鷺「うっ・・・そうじゃなくてオメェ～に聞きたいことがあんだよ!」

狭間「き、聞きたいことって?・・・この僕に?」

青鷺「ああ・・・」

狭間「妖怪のことかな?この僕に??是非とも聞いてよ!妖怪のことなら何でも知っているから!!」

目を輝かせながらそう言った。

青鷺（くっ・・・こいつ・・・ウゼェ～・・・）

青鷺「と、とりあえず・・・最近、流行っている怪談話ってあるか？」

狭間「最近かな？」

青鷺「ああ・・・特に流行している奴・・・」

狭間「それならあるよ！とびっきりの奴が！」

青鷺「本当か！是非教えてくれ！！」

狭間「もちろんさ！それはね・・・」

狭間「最近この近くの海によく出るらしいんだ・・・」

青鷺「何が？」

狭間「それがこの怪談だよ・・・」

〈七尋女房の怪異〉

これは、近所のおじさんから聞いた噺（はなし）なんだ・・・。

いや、今噂されている怪談なんだけど・・・。

夕方・・・そうだな・・・昼と夜の境の時・・・。

〈逢魔が時〉の時間だな・・。

背丈が１２，５メートルにも及ぶ女の人が出るらしいんだ・・・。

出る場所？

それは、近くのあの裏山かな？

その人は、そこで道に迷った人間達を誘い込み襲うんだ・・・。

だから、〈逢魔が時〉にはその山には近づかない方がいいよ・・・。

決して行ってはいけないからね・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

青鷺「なるほど・・・」

狭間「まっ！本当かどうか分からないけどな！」

青鷺「ＯＫ！その〈七尋女房の怪異〉はいつから広まったんだ？」

狭間「そうだな・・・確か・・・君が転校してきてからすぐだよ！」

青鷺「そうか・・・」（てことは、〈越前組〉が動き出してから奴らも動き出したか・・・それとも〈越前組〉と関わりがあるのか・・・）

青鷺「今日は教えてくれてありがとな！」

そう言うと青鷺は屋敷へと引き返した。

ー越後組本家ー

イタチ「と言うわけでして・・・」

青鷺「それでオメェ～らに手伝って貰うわけだ！良いか？」

濡女「もちろんですわ！」

異獣「それでしたらお任せを！！」

青鷺「オメェ～も良いだろう？キリ？」

キリと呼ばれた妖怪が返事をした。

キリ「お任せを・・・」

〈大蟷螂（オオカマキリ）の怪〉

越後組幹部兼三代目側近

冷静沈着で物事を常に瞬微に取り組んでいる。

越後組の中でも優秀。

青鷺「よし！オメェ～ら！！すぐにでも情報収集だ！！」

全員「了解！！」

～Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅ～

～特別編～　怪談はさらなる恐怖をうむ（後書き）

と言うわけで・・・

少しおつきあいを！！

特別編なんでもうちょっとだけ続きます！！

次回もお楽しみに！！

～特別編～　七尋女房の怪異

～越後組～

青鷺「なるほどなぁ～」

キリ「恐らくあの裏山が怪しいと思われます・・・」

青鷺「・・・で、どうするかだが・・・」

異獣「そんなもん決まったてんでしょ！我々のシマで暴れる輩は我々が潰すんですよ！」

異獣が真っ先に答えた。

青鷺「それは分かってんだが・・・問題はその後だ・・・その〈七尋女房の怪異〉がどういう妖怪なのかが・・・それが分からんと対処ができない・・・」

??「よぉ～紅蓮～困ってるみたいじゃなぁ～」

そこへ一人の年老いた妖怪が姿を現した。

青鷺「げっ！？・・・ジジィ～」

〈青鷺火〉

〈越後組〉初代組長

今は隠居生活を楽しんでいる。

キリ「初代・・・」

青鷺火「困っているようじゃなのぉ～」

青鷺「ま、まあな・・・そうだジジィ！〈七尋女房の怪異〉って知ってるか？」

青鷺火「〈七尋女房の怪異〉かぁ～・・・それなら確か山陰や山陽の地方で聞いたことがあるのぉ～」

青鷺「山陰！？中国地方か？」

青鷺火「おおぉ～今はそう呼ばれてるみたいじゃなぁ～」

青鷺「てことはそんな遠くから俺たちの畏れを奪うつもりか？」

異獣「なら善は急げですぜ！！今からでも！」

青鷺「そうだな・・・行くか？」

青鷺火「気を付けろよぉ～なにせ未知の領域だからのぉ～」

青鷺火が注意を促す。

？？「若ぁ～！！大変です！！」

そこへ濡女が駆け込んで来た。

青鷺「どうした？」

濡女「そ、それが・・・若の御学友が！！例の裏山に！！」

青鷺「何っ！？ちっ・・・あのバカ！オメェ～ら行くぞ！出入りだ！」

一同「へい！！」

青鷺は羽織を手に取り屋敷から出ようとした。

そこへ・・・

青鷺火「待ちな！コレを使いや！」

青鷺火は何かを放り投げた。

青鷺「おっと・・・コレは・・・」

青鷺火「テメェ～の親父さんのつまり・・・ワシの息子の刀・・・〈妖刀　蒼火紅蓮（ソウカグレン）〉じゃ！」

青鷺「良いのか？俺が使って・・・」

青鷺火「床の間に飾られているよりお前に使って貰った方があいつも喜ぶじゃろぉ～」

青鷺「だが・・・何で今になって？」

青鷺火「いずれ分かるぞ・・・」

青鷺火はそう言うと奥へ戻っていった。

青鷺「格好付けやがって・・・よし！オメェ～ら行くぞ！」

異獣「俺たちだけでよろしいんですか？屋敷の奴らも行きたがっていますが・・・」

青鷺「少数で動いた方が良いだろう？」

キリ「確かにそうかも知れませんね・・・」

青鷺「分かったら行くぞ！」

青鷺達は裏山を目指した。

ー裏山ー

青鷺「ここか・・・」

青鷺たちは裏山の入り口に来ていた。

青鷺「禍々しい畏れを放ってやがる・・・」

キリ「時刻は・・・まさに〈逢魔が刻（おうまがどき）〉ですな・・・」

青鷺「ああ・・・闇と現実の境目だからな・・・」

異獣「中へ行きますか？」

青鷺「じっとしてちゃ意味が無いからな・・・キリ！先に中の様子を見てきてくれ！」

キリ「了解！」

キリは素早くジャンプし山の中へ消えた。

青鷺「行くぞ！」

青鷺たちは山へと足を踏み入れた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

？？Ａ「まただねぇ～またお客がやってきた・・・今度は人間じゃ無いみたいだな・・・さて・・・」

謎の妖怪は先ほど捕まえた人間に向き直った。

？？Ａ「さてどう料理しようか・・・その前にもっと私を怖がりなさいよ！怖いよぉ～助けてぇ～って・・・もっと恐れるのよ！！」

ザッ

不意の足音がした。

？？Ａ「誰！？」

？？Ｂ「産みの親に誰とは失礼だね・・・〈七尋女房の怪異〉・・・」

??A「あんたでしたか・・・」

??B「順調に畏れを集めて居るみたいだね・・・」

七尋女房「ええ・・・我々の力の根本は人間から〈恐れ〉られることでしょ～」

??「そう哉(カナ)・・・まぁ～消えないように頑張ってくれよ・・・僕の怪談集めは始まったばかりだからね・・・」

謎の妖怪はその場を立ち去った。

～To Be Continue～

～特別編～　七尋女房の怪異（後書き）

特別編、更新が遅くなり申し訳ありません。

あと、２話くらい続く予定です！！

次回もお楽しみに！！

～特別編～　続・七尋女房の怪異

青鷺一行は裏山の奥へと向かっていた。

異獣「しかし・・・三代目？こんなところに居るんでしょうかねぇ～？」

側近の異獣が聞いてきた。

青鷺「分からないな・・・まずはキリの情報を待つとするしかない・・・」

濡女「本当に居たらそんな奴さっと潰しちゃいましょう！」

側近の濡女がせかして言った。

青鷺「分かってる！相手が未知の妖怪だから油断はできんぞ・・・」

？？「三代目！」

青鷺の真横に一人の妖怪が現れた。

青鷺「キリか？どうだった？」

キリ「奥・・・つまりは山頂にただならぬ妖気を確認しました・・・おそらくそれではないかと・・・」

青鷺「山頂だな？」

キリ「ええ・・・あと例の人間も確認できました・・・数名ですが・・・」

青鷺「それだけ分かればＯＫだ！丁度山頂に向かっていたしな・・・」

青鷺たちは足を早めた。

ー山頂付近ー

青鷺「確かに・・・結構な妖気を感じるな・・・」

異獣「肝心の奴が居ませんぜ・・・」

??「奴とは誰のことじゃぁ～？」

突然どこからか声が聞こえた。

青鷺「ちっ！？妖気を消していたか！？」

??「上だよぉ～」

その声はハッキリとそう言った。

青鷺たちはその声に便乗して一斉に上を見上げた。

一同「何っ！？」

見上げるとそこにはそこらの杉の木と同じくらいの高さの妖怪がこちらを見下ろしていた。

青鷺「てめぇ～が〈七尋女房の怪異〉か？」

七尋女房「そうさ・・・そして貴様らは今私を畏れただろう？背が高いことに驚いただろ？気圧されたのさ！」

青鷺「だから何だ？」

七尋女房「私を畏れたものは無条件で私の畏れの世界に引きずり込むのさ！」

青鷺「！？」

七尋女房「おや・・・まだ大丈夫な奴が居たみたいだが・・・」

青鷺は周りを見るとキリが居ないことに気づいた。

青鷺「はんっ！中々やるじゃねぇ～か・・・」

七尋女房「私を相手にどうする？」

青鷺「んなもんハナから決まってらぁ～！！こうするまでだ！！」

青鷺は刀を抜くと七尋女房に斬りかかった。

七尋女房「言っただろう・・・個々は私の世界・・・ここでは私の意のままなんだよ・・・」

青鷺「何っ！？」

七尋女房はゴミを払いのけるようにして青鷺を弾いた。

青鷺はとっさに避けようとしたが。

青鷺「か、体・・・」

体が金縛りにあったようになりそのまま攻撃をまともに喰らってしまった。

青鷺「ぐはぁぁ！？」

そのまま奥の林に突っ込んだ。

異獣・濡女「三代目！！」

二人は青鷺の所に駆けつけた。

異獣「大丈夫ですか？」

異獣は心配そうに声を掛けた。

青鷺「心配するな・・・これきし・・・」

七尋女房「言っただろう？ここでは貴様の能力も使えんからな！」

青鷺「くっ！？どうすれば・・・」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ー現世界ー

キリ「やれやれ・・・三代目達はどこに・・・空を見上げたと思ったら消えてしまった・・・」

キリは一人どこかに仕掛けがないか探していた。

キリ「恐らく奴の畏れの世界に連れて行かれてしまったな・・・これだけ探してもダメならそれしかない・・・後は・・・その鍵だ・・・」

キリは暫く考え込んだ。

キリ「なら消えた場所へ行ってみるか！」

キリは急いで元の場所へ戻った。

キリ「ここだな・・・よし・・・」

キリは元の場所に戻ると何か始めた。

キリ「人間は居ないから大丈夫だな・・・はあっ！」

キリは自分の両手を鎌に変化させた。

キリ「鬼憑畏(ひょうい)れの移動・・・」

キリは自分の畏れを両手の鎌に集めた。

キリ「畏れの断ち切り・・・大鎌・殺戮刃(さつりくやいば)」

キリは目の前の空間を切り裂いた。

ー畏れの世界ー

青鷺「くっ・・・」

青鷺の横には異獣と濡女が倒れていた。

七尋女房「貴様の下僕(しもべ)も大したことないな・・・」

青鷺「ここまでか・・・」

七尋女房「死にな!!」

七尋女房は自らの巨体を利用して青鷺を踏みつぶそうとした。

そのとき・・・

??「三代目(その人)に手ぇ〜出すんじゃねぇ〜!!」

その声の主は空間を切り裂き今にも踏みつぶそうとしていた足に切りつけた。

七尋女房「ぎゃぁぁぁぁぁぁ!?」

青鷺「おせぇ〜じゃねぇ〜か・・・キリ」

キリ「お待たせしやした・・・三代目！」

七尋女房が斬られた途端畏れの世界が消え元の世界に戻った。

元の世界に戻った途端七尋女房の背は青鷺と変わらないくらいになっていた。

青鷺「さて・・・今までの借りを返させて貰うか・・・」

七尋女房「お、おのれぇ～・・・ま、待て！？・・・コ、コレを見よ！！」

七尋女房は後ろを指さした。

青鷺「何っ！？」

そこには数人の人間が木に縛り付けにされていた。

七尋女房「小奴らがどうなってもいいのじゃな？」

青鷺「てめぇ～・・・」

七尋女房は縛り付けにされている人間の方に向かうとなにやら動きを見せた。

七尋女房「ほらぁ～叫べよ！さっきみたいに・・・怖いよ～帰りたいよ～助けて～って」

七尋女房は脅かし始めた。

それを見て人間達は震えだした。

青鷺「何してんだ・・・？」

七尋女房「そうよ！もっと恐がりな！私ら妖怪は恐れられるほど強くなる・・・そうでしょう？」

青鷺（な、何だこいつ・・・妖気が大きくなっていく・・・）

七尋女房「恐れられた力を見せつけてやる！！」

七尋女房は懐から短刀を抜いた。

七尋女房「畏れの再点火！！」

短刀が禍々しいオーラに包まれた。

青鷺「ふん！笑わせるな！恐れられた方が強いだと？それは違うな・・・」

青鷺はそう言いながら自分も刀を抜いた。

青鷺と七尋女房は同時に地面を蹴った。

ズバン！

七尋女房「ぐはっ！？」

七尋女房は力が抜けて倒れた。

七尋女房「な、何故だ・・・・こんなにも恐れられたというのに・・・」

青鷺「確かに恐れられれば強くなるさ・・・だがな〈畏れ〉と〈恐れ〉じゃ背負っている仲間(モン)が違うんだよ！」

七尋女房「お、おのれぇ～・・・・ち、力が・・・私の畏れが消えていく～」

青鷺「消える前に言えや！おめぇ～はどこのモンだ？」

七尋女房「イッヒッヒッヒッヒッヒッヒッ・・・せいぜい・・・気を付けるんだな・・・〈恐れ〉がある限り我等〈中国怪談組〉はあり続ける・・・せいぜい〈畏れ〉を奪われないように気を付けるんだな・・・私が消えても語り継がれて欲しいねぇ～・・・七尋・・・女房の・・・かいだ・・・」

そう言うと七尋女房は消え去った。

青鷺「中国怪談組か・・・」

ザッ

不意に足音が聞こえた。

青鷺「誰だ？」

振り返りながらそう聞いた。

??「まさか・・・倒しちゃうとは・・・〈七尋女房の怪異〉じゃだめだった哉(カナ)」

青鷺「貴様は・・・」

??「初めまして・・・〈中国怪談組〉の者だよ・・・」

青鷺「!?」

～特別編～　続・七尋女房の怪異（後書き）

特別編は次回がラスト！！

お見逃し無く！！

このまま行ったら連載しそうな勢いですが・・・

まだ未定です・・・

では次回もお楽しみに！！

～特別編～　続々・七尋女房の怪異

??「どうも・・・初めまして！〈中国怪談組〉の者だよ」

青鷺「テメェ～がか？」

??「自己紹介がまだだったな・・・私は怪談話を集めて広める役をしている新野悪五郎と言うものだよ」

青鷺「新野・・・悪五郎？」

新野「そうだよ・・・さらに言えば・・・〈中国怪談組〉の長だよ・・・」

新野悪五郎はそう言った。

青鷺「なぜ、中国のやつらがここを狙う？」

新野「それはね・・・東京でもうひとつ・・・〈中国（ウチ）怪談組〉と同じような組があってね・・・近々反撃するってんで・・・僕らも真似ようかなと思っただけさ・・・ここには暫く用はないね・・・」

青鷺「おい！東京って言ったな？それは〈奴良組〉と何か関係があるのか？」

新野「さぁ～ね～詳しいことは教えられないね・・・ボクも詳しくは聞いていないしね！」

新野はそう言い残すとヒラリと向きを変え暗闇に消えていこうとし

た。

青鷺「待ちやがれ！まだ話は！！」

新野はぴたりと足を止めた。

新野「そうそうあとひとつだけ言っておこうか？」

青鷺「なに！？」

新野「近々伝説の主が・・・復活するよ！」

青鷺「伝説の主だと？」

新野「そうだよ・・・この世は妖怪の世になるかもね・・・言っておくけどボクの怪談話はこれで終わりじゃ無いからね・・・これからとっておきのを越前の奴らに送りつけるのさ！〈越前組〉はこれで終わった哉・・・」

ハッハッハッと笑いながら暗闇に消えていった。

青鷺「中国地方か・・・」

ー翌日ー

青鷺火「確かにそいつはそう言ったのじゃな？」

紅蓮「ああ・・・ジジィは知っているのか？その伝説の主とやらを・・・」

青鷺火「知っておる・・・じゃがお主には話すことではない・・・あとひとつじゃが関係あるかは分からんが・・・京都で妖怪どもが活発化しているらしい・・・」

紅蓮「京都って言えば・・・最強の結界があるんじゃなかったのか？」

青鷺火「恐らく効果が切れかかっておるのじゃろう・・・」

紅蓮「それはともかく・・・オレが今一番興味があるのは〈奴良組〉だ・・・近々行ってくるかな？」

青鷺火「好きにせい・・・」

紅蓮「とりあえず報告はしたからな！」

青鷺は部屋から立ち去った。

青鷺「さてそろっとこのシマの再構築を考えないとな・・・」

青鷺は縁側を歩いていった。

青鷺「この〈越後組〉構成妖怪団体６０団体構成妖怪１００匹・・・その前にオレも強くならんとな・・・これからが本番だぜ・・・」

青鷺は静かにほくそ笑んだ。

青鷺「北陸の勢力図がまた変わりそうだな・・・対策でも練っておくか・・・」

青鷺たちの〈越後組〉の戦いは始まったばかりだ。

ーENDー

～特別編～　続々・七尋女房の怪異（後書き）

これにて特別編は終了です！

連載するときにはまたよろしくお願いします！

では！そのときまで！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3473u/

〔読み切り〕　ぬらりひょんの孫　～Another story～

2011年9月7日16時39分発行